

行人

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1913) 「朝日新聞」

参考：『お茶漬の味』(1952) 監督：小津安二郎

出演：佐竹茂吉 佐分利信 脚本：野田高梧
佐竹妙子 木暮実千代 小津安二郎
山内節子 津島恵子 撮影：厚田雄春
雨宮アヤ 淡島千景 音楽：伊藤宣二

死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか

『彼岸過迄』『行人』『こころ』は漱石の後期三部作で、それぞれ市藏、一郎、先生という真面目に、つきつめてものを考えるタイプの人物が主人公になっている。三人とも頭がおかしい。

なかでも特におかしいのが『行人』の一郎。大学の先生で、高潔な人格者だが、妻のお直への異常な嫉妬にさいなまれている。

同居している弟の二郎にお直が心を寄せていると疑っているが、確証がない。そこで「実は直の節操をお前に試して貰いたいのだ」と一郎は二郎に依頼する。「試すって、どうすれば試されるんです」と二郎が聞くと、「御前と直が二人で和歌山へ行つて一晩泊まってくれば好いんだ」。

まったく常識はずれの提案だ。頭が狂っているとか思えない。その点は本人もわかっていて、「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか。ぼくの前途にはこの三つのものしかない」という自覚がある。こんな小説を読むと、こちらまで頭がおかしくなってきたきそうさ。口直しに小津安二郎監督の映画『お茶漬の味』を観た。

主人公の佐竹茂吉（佐分利信）は信州の田舎出身のサラリーマン。洗練された趣味を持つ都会の妻（木暮実千代）からは「鈍感さん」といってバカにされている。

妻は友人の高子（上原葉子）が病気になるた



行人——映画文学人生論

ウソを言い、やはり友人のアヤ（淡島千景）と姪（津島恵子）の四人で修善寺へ遊びに行く。温泉宿の池に動きの鈍い鯉がいるのを見て、「鈍感さん」と呼び、餌を投げる。とんでもない悪妻だ。修善寺といえ、漱石が大病して三十分間人事不省に陥った温泉である。おそらく小津安二郎は漱石の大患を意識して映画のロケーションに修善寺を選んだのではないかと思う。

それはともかく、鈍感さんと侮られた夫は実は妻のウソを見ぬいていた。知らないふりをして、妻の行動を許す度量の広い男だったのである。会社では部長の要職にあり、急に南米ウルグアイのモンテビデオへ出張しなければならなくなる。

当時の海外出張は空港で盛大な見送りをする習慣があったが、肝心の妻は神戸まで遊びに行っていて、見送ることができない。ところが、飛行機が故障して途中から引き返し、出発が翌朝に延びたために、その夜遅く、夫が自宅へ帰ってきた。

二人は台所でしみじみと語り合いながらお茶漬けを食べる。妻ははじめて夫婦というものの味をかみしめたという結末である。

『行人』の一郎は「死ぬか、気が違うか、それであれば宗教に入るか。ぼくの前途にはこの三つのものしかない」と思い込むが、もう一つの選択肢「鈍感」があることには気がつかなかった。

此の道も行く人がいて神の留守